

教科「自由研究」に関する研究

キーワード：自由研究，カリキュラム，教育方法，戦後教育，学校図書館

所 属 教育システム

氏 名 田中 千晴

1. 論文の構成

- 第1章 はじめに
 - 第1節 背景
 - 第2節 先行研究
 - 第3節 研究の目的と方法
- 第2章 教科「自由研究」の歴史
 - 第1節 教科「自由研究」の系譜
 - 第2節 教科「自由研究」の実施
 - 第3節 教科「自由研究」の廃止
- 第3章 教科「自由研究」の実践～成蹊小学校の取り組み～
 - 第1節 教科「自由研究」の成立と社会科
 - 第2節 教科「自由研究」の指導
 - 第3節 教科「自由研究」の評価
- 第4章 教科「自由研究」のその後
 - 第1節 東京都港区立氷川小学校の実践
 - 第2節 東京都港区立竹芝小学校の実践
 - 第3節 東京学芸大学附属世田谷小学校の実践
- 第5章 おわりに
 - 第1節 考察
 - 第2節 本研究の成果と意義
 - 第3節 今後の課題

2. 論文の梗概

第1章 はじめに

次期学習指導要領のキーワードとしてアクティブラーニングが使用され、教育方法として、探求や学び方を学ぶといったことが注目されるようになってきた。ICTの普及もあり、今後も個の興味・関心と能力に応じた学びのあり方はますます求められてくるだろう。初等・中等教育における教授から学びへの転換は大学の入試制度のあり方にも変化を要請するものとなりうるだろう。

赤木かん子『お父さんが教える自由研究の書き方』（2009）という本がある。この本の購入者のコメント欄に、「おじいちゃんですが、買いました。」と書かれていることは余談だが、子どもとの関わりを持つ保護者に向けて出版されており、保護者に自由研究を通した子どもとの関わりを求めるニーズに応じたものといえる。

「自由研究には教師が関わらないほうがいい」と答える教師も少なくない。1984年より毎年夏休みの期間に放送されるNHKラジオ番組「夏休み子ども科学電話相談」では、放送時間中にスタジオの専門家が電話でわかりやすく解説しながら回答する。各放送日において設定された対象分野に合わせて質問が募集され、分野ごとに専門家が順次質問に対して回答していくのだが、問いに答えるということは容易なことではなく、回答に専門家も大変苦労している。個の興味・関心と能力に応じた学びに関わるということはとても難しいことではあるが、子どもの鋭い質問や専門家の優しく丁寧な受け答えは評判になっている。教科「自由研究」として、個の興味・関心と能力に応じた学びが、学習指導要領（試案）として、法的拘束力のなかった頃ではあるが、全国各地で実施された。教科「自由研究」が小学校では4年間、中学校では2年間という短い期間で廃止された課題は未解決のまま今なお残されている。

教科「自由研究」は、主に特別教育活動や教科外活動の先駆的なものとして語られてきた。教科「自由研究」から活動に重点が置かれ、特別教育活動となっていくところは、今、アクティブラーニングにおいて危惧されている活動を行うことだけに重点が置かれてしまうことと類似している。教科「自由研究」は、他にもクラブ活動や部活動の系譜、理科の自由研究の系譜、学校図書館の成立との関わりの中で取り上げられてきた。しかし、教科「自由研究」の実践に関する資料をもとにした先行研究としてあげられるのは、以下の5つである。

赤塚康雄（1981）は、教科「自由研究」に関する実践資料をもとにすすめられた最初の研究であり、地域から、日本の戦後教育改革の展開の実態を明らかにし、意味を問うことによって、逆に日本の戦後教育改革を捉えようとした。上粕中学校において、自由研究が、どのように実施され、その結果どうなったのかを具体的に追っている。上粕中学校における教科「自由研究」に関して、「自由研究発表会プログラム」、「研究帳（折々に研究した内容を書き止めていたもの）」、『自由研究の実際』、『上中新聞』に掲載されている生徒の日記などの資料をもとに、生徒の興味、研究方法などの研究動向や活動のあり方を

明らかにしようとした。教師の指導が、家庭まで延びなかったところに、学校において自由研究が低迷し、やがて、廃止せざるを得なかったと考察している。次に、松浦善光（1981）は、学校新聞をもとに、京都府山城町の上狛中学校と大阪市の東第一中学校を比較分析している。そして、河野智文（1996）は、広島高等師範附属小学校学校教育研究会『自由研究の方向と実践』（1948）をもとに広島高等師範附属小学校における国語科の学習指導と自由研究との関連を考察している。さらに、青木靖（2005）は、栃木県師範学校附属小学校（宝木小学校）において社会科を担当していた教師へのインタビューや「たからぎ研究紀要・第一集・宝木附属における学校経営」をもとに、教科「自由研究」の実践を明らかにしようとした。最後に、山本隆大・野田敦敬（2012）は、成蹊小学校教育研究所『生活教育研究 第一集 自由研究と社会科の指導』（1948）において紹介されている成蹊小学校の実践例を分析し、実際に教科「自由研究」を成蹊小学校において実践した元教師に聞き取りを行い、「自由研究」が廃止された当時の「自由研究」の問題点を3つ、①学力低下に伴うコアカリキュラムへの批判の発生、②教師に教科の補習としてのクラブ活動として運用されてしまい本来の目的を果たせなかった点、③子どもに「探究」させるための方法は教師の技量に任される点と考察している。

教科「自由研究」の実践について明らかにしていくためには、教科「自由研究」に関する資料を収集し、研究の量、質ともに充実させていく必要がある。研究の目的は、教科「自由研究」の実践について明らかにしていくこととする。研究の方法は、教科「自由研究」に関する文献調査とする。

第2章 教科「自由研究」の歴史

教科「自由研究」は、1947年の「学校教育法」、1947年5月の「学校教育法施行規則」において成立する。1947年5月に発表された学校教育法施行規則第24条に、「小学校の教科は国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作、家庭、体育及び自由研究を基準とする」と規定され、同法第52条で「中学校の教科は、これを必修教科と選択教科に分ける」とされ、さらに同法第54条で、「…選択教科は外国語、習字、職業及び自由研究を基準とする」と規定される。1947年版『学習指導要領・一般編（試案）』では、教科「自由研究」の時間配当として、小学校では第4～6学年において毎週2～4時間、中学校では各学年を通して毎週1～4時間が基準として示される。そして、文部省は、「小学校の教科と時間配当 学習指導要領一般編中間発表」の中で、教科「自由研究」の時間の用い方として、①個人の興味と能力に応じた教科の発展と

しての自由な学習、②クラブ組織による活動、③当番の仕事や、学級委員としての仕事の3種類の形態があることを示し、1951年の学習指導要領の改訂において、②、③は特別教育活動に継続され、①に関する事項は教科の中で解消されうるとの理由から廃止する。

公益財団法人教科書研究センター内にある教科書図書館において、教科「自由研究」に教科書があるのか昭和20年代の『教科書目録』を調査したところ、教科「自由研究」に関する項目はなかった。よって、教科「自由研究」には教科書は存在していなかったと考察する。

「学習指導要領に対する小学校教師の意見（一般編）」、「学習指導要領に対する中学校教師の意見の調査（一般編）」、「学習指導要領編修会議・教育課程審議会・初等中等分科審議会記録等（大島文義旧蔵文書メモ）」によると、「①具体的な、すぐに間に合うような学習指導法を求めている小・中学校教師がいた。②子どもに問題を持たせることに苦心しており、問いの設定に課題があった。③教科「自由研究」の実践では、教科の枠を出ることが多かった。④教科「自由研究」の実践では、教師に空きがないとの意見があった。教科「自由研究」の充実のためには教師の人的確保も課題だった。⑤教科「自由研究」には、学級、学年を解体していく側面があった。」ことが考察された。

第3章 教科「自由研究」の実践～成蹊小学校の取り組み～

滑川道夫「生活教育における自由研究と社会科」（滑川道夫（代表）『生活教育研究』、1948）には、「一九四六年四月、まだ国民学校時代の教科課程に據らなければならなかったころ、教科外の指導として、1. 自由研究指導（児童の自発的自由な研究）、2. 生活指導（児童の生活自治組織の運営）、3. クラブ指導（子どものクラブ活動の指導）の三つを頭にえがいていた。社会科が誕生する以前のことであるから、社会科の活動をも、この自由研究の構想の中にふくめて、「文化学習」と呼んで出発した。」とあり、成蹊小学校では、教科「自由研究」がその後誕生する社会科を含めた形で、文化学習として構想されていたことがわかる。また、「自由研究の中から社会部を除外するかどうかという問題に直面したわけである。」とあり、社会科誕生後は、自由研究における社会部をなくす議論もあったことがわかる。

文部省において社会科創設に関わった重松鷹泰『社会科教育法』（1955）によると、「教科「自由研究」はまったく日本側の独創であり、Free Studyと直訳したらCIEの人びとは眼を丸くして驚いていたようだ。」とある。また、同書の中で、重松鷹泰は、「これを考えたのは、学校

教育局に属する視学官室の村上視学官、野村視学官らではないか。」と述べ、さらに「教科「自由研究」の成立の過程において、どうも社会科と同じようなことになるらしいということを知り、研究内容を指示したりすることをやめてもらい、個性伸長というところに重点をおいてもらうよう、上司を通じて願い出た。」と述べている。

成蹊学園教諭吉田虎彦『よい子の自由研究（五・六年編）』（1949）に掲載されている子どもによる自由研究の作品に対する教師の批評は以下である。①科学に関する自由研究は多いが、歴史に関する研究は少ない。科学の方面は一般的に実物に直接ぶつかって、観察したり実験したりして調べることができるが、歴史に関する方面は主として書物によって調べなければならないので、子どもにとっては研究がしにくい。たまたま歴史に関する研究があっても、多くは書物のぬき書きや、引き写しをしたものなどで、見るべきものが少ない。事例では、知りたい物事について詳しい指導者として父親、祖母が関わるなど、教師、保護者、地域の方との関わりがより深い学びに導いている。②本や雑誌を読んで研究するだけでなく工場や展覧会へ行き見学し、各方面の人の意見を伺い、実地の見聞を取り入れている。③自由研究には数学に関するものが少ない。子ども向きの数学の本を勧める。

成蹊学園史料館に保管されている「昭和 22 年配布資料」という資料より、成蹊小学校において、自由研究について、自主、独創、整理という観点から評価を行っていたことがわかる。

第4章 教科「自由研究」のその後

東京都港区立氷川小学校の資料により、「①研究発表会として、年5回（各学期末、夏休み・冬休みの後）、各期間における自由研究の成果を発表した。②研究は、個人乃至はグループにより行った。③研究テーマは、身近なものから選んだ。④教師に、自発的な研究態度を作る、研究方法を会得する、研究完成及び発表結果の喜びを味わい研究心を盛んにする、発表の結果の正否の検討を広く他人に求めて発表になれるといった観点があった。⑤指導その他改善すべき点が多かった。」ということが明らかになった。他にも、「研究発表会も二十二年以来七年を経過して、発表の態度、研究方法等も向上し、殊に図書館の利用は著しく進歩している。」と記載があり、1947年に教科「自由研究」においてはじめられた研究発表会が、1951年以降も実施されていたことがわかる。さらに、継続的に研究されたものが評価を受けたことや、研究発表会が一部の人だけに限らず、もっと大勢の人に経験させたいという教師の意見があったことも明らかとなった。

東京都港区立竹芝小学校『開校 70 周年記念誌たけし

ば』（1978）の資料から、「①1978年頃に自由研究発表会が行われていた。②自由研究発表会を保護者が後ろで参観していた。③研究発表会の発表者は各学年の代表者だった。④クラスの代表を決める際クラスの子どもたちによる多数決で決められていた。」ということがわかった。

東京都港区立氷川小学校と東京都港区立竹芝小学校の実践の資料から、学習指導要領が改訂されて教科「自由研究」が廃止となった後も自由研究発表会を通して教師が個の興味・関心と能力に応じた学びに関わっていることが考察できた。

東京学芸大学附属世田谷小学校においては、『H. 15 年度 6 の 3 卒業論文』、『卒業個人論文集 6 の 2』

(2006) をもとに、特に子どもができなかったことに着目して考察を行った。テーマは、教科の枠を超えているものが数多くあった。白紙の自学ノートに自分の興味・関心があることを書き溜めていっており、教科書として与えられる内容を暗記しているのではなく、自分が学びたいものを学んでいったことがわかる。これはまさに、子どもの学びを子どもに返す教育方法の一つといえる。しかし、主体的な学びが必ずしも深い学びになるとは限らない。教師が子どもを質の高い学びへと導くためには、教科による教員養成とはちがう専門性が求められることになるだろう。子どもの振り返りには、「①日本だけでなく、海外についても知りたい。②どうしたら興味のない人に興味をもってもらえるのか、世界的に認められるにはどうしたらいいのかについて知りたい。③論文形式に戸惑いがあった。④テーマを決めることにとっても迷った。⑤論文作りはとてつもない経験であり、今後に生かすことができる。⑥細かい資料がなかったので、多くの結果がはっきりしなかった。⑦普段なら調べようとも思わないことまで調べるきっかけになった。⑧本の著者に取材をし、スタッフの方にも協力してもらい、たくさんの資料を提供してもらった。⑨まだ調べきれていない。⑩将来なりたい職業について調べた。⑪論文を書いて、今までとは違う視点で物事を見ることができた。⑫テーマが難しく、理解しにくいところもあった。⑬子どもにも分かるように書くというのは、とにかく大変だった。⑭大人になるまでとっておいて、大人になった時にもう一度同じテーマで論文を書き、見比べたい。⑮インターネットであまりいい情報が得られなかったので、もっと違う方法を見つけられれば良かった。⑯もっと詳しく、もっと分かりやすく、もっと見やすく仕上げたい。⑰資料が集まっても、なかなかまとまらなかった。⑱新聞の内容が難しかったので、親に分かりやすく説明してもらった。⑲一つのことを重点的に書いたほうが良かった。⑳自分

のためになった。」等が述べられている。

教師の指導について、「①一人一人の子どもを大切にしていた。②言語活動が充実していた。③教師に、題材について、個人としての視点が明確であるか、大きすぎる題材を選んではいけないか、個人の主張は鋭いか、自分の生活に密着しているかといった観点があつた。④教師に、研究方法について、コンピューターからの資料や文献からの資料をそのまま流用するだけで済ませていないか、地道に自分自身の手や頭や足を使って試したり集めたりまとめ直しているかといった観点があつた。⑤教師に、研究成果について、事実はしっかりと文章などに表れているか、客観性はあるか、主観であれば、その人の基準・規準はどこに据えているか、成果を書いた人にどのような宝になっているのかといった観点があつた。⑥教師には、残された課題について細かくその問題点を指摘しているか、次の研究につながる課題として明記されているかといった観点があつた。」ことが読み取れた。

第5章 おわりに

教育方法において、問題解決学習は社会科をはじめ他教科でも研究されてきたが、自由研究は、あまり研究されてきていない。自由研究とは個の興味・関心と態度に応じた学びであり、それに対して、教師が、保護者が、地域が子どもの興味・関心と能力にどのように関わっていくのかについて考え、関わっていくことは、これからますます求められてくる教育方法の一つである。自由研究の実践は、子どもの学びを子どもに返す実践であり、教科中心主義からの脱却の試みである。従来の教員養成のあり方にも変革をもたらすものでもある。

教科「自由研究」の実践を明らかにするため、既収の資料については比較分析を行っていく。未収の資料に関しては、戦後教育雑誌や自校史、都道府県史などを視野に入れて調査していきたい。

記録として残っているものだけではなく、日々取り組まれている実践の中にも良さがあるというのも事実である。そういった実践へのアプローチとして、教科「自由研究」を受けた方々を対象としたインタビュー調査があると考える。教師へのインタビュー調査は、先行研究としてあるのだが、子どもへのインタビュー調査はまだ試みられていない。

3. 主要参考文献

- * 赤木かん子『お父さんが教える自由研究の書き方』、2009、株式会社自由国民社
- * 安藤秀俊・梅野桃子「理科の自由研究の系譜と附属小学校における児童の意識」、『福岡教育大学紀要』、

第57号、第4分冊、2008

- * 赤塚康雄「自由研究の展開と地域」、『戦後教育改革と地域—京都府におけるその展開過程—』、1981、株式会社風間書房
- * 松浦善満「戦後「自由研究」と教科外教育の成立過程（その1）—京都・上狛中、大阪東第一中の実践比較より—」、関西教育学会編『関西教育学会紀要』、第7号、1981、関西教育学会
- * 河野智文「広島高師附小「自由研究」における国語学習指導」、『論叢国語教育学』、第4巻、1996
- * 青木靖「戦後「教科・自由研究」の教育実践に関する一考察—栃木師範国民学校と附属宝木小の実践を中心として—」、日本学校教育学会機関誌編集委員会編『学校教育研究』、第20号、2005、株式会社教育開発研究所
- * 山本隆大・野田敦敬「昭和22年度学習指導要領（試案）教科「自由研究」から見る探究活動の課題について」、『愛知教育大学研究報告 教育科学編』、第61輯、2012
- * 文部省「小学校の教科と時間配当 学習指導要領一般編中間発表」、教育技術連盟編『教育技術』、第5巻、第12号、1951、株式会社小学館
- * 文部省「〈昭和22年〉学習指導要領一般編（試案）」、細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編集代表『新教育学大事典』、第7号、1990、第一法規出版株式会社
- * 磯田一雄「自由研究」、細谷俊夫・奥田真丈・河野重男編『教育学大辞典』、第3巻、1978、第一法規出版株式会社
- * 小宮進「第一章教育の民主化と自由研究（昭和後初期）」、奥田真丈監修『教科教育百年史』、1985、株式会社建帛社
- * 水原克敏編・解題『編集復刻版 戦後改革期文部省実験学校資料集成 第1回配本（第1巻～第3巻）』、2015、不二出版
- * 滑川道夫「生活教育における自由研究と社会科」、滑川道夫（代表）『生活教育研究』、1948、株式会社小学館
- * 重松鷹泰『社会科教育法』1955、成文堂
- * 成蹊学園教諭 吉田虎彦『よい子の自由研究（五・六年 編）』、1949、株式会社泰光堂
- * 岡田達雄編『氷川教育 特集・学校図書館』、1957
- * 久米井束編『氷川教育』、第1～4号、1952～1955
- * 東京都港区立竹芝小学校『開校70周年記念誌たけしば』、1978